

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	特殊状況下における子どもの感情発達 : なまいき
Author(s)	山田, 貴洋子
Citation	児童の言語生態研究 , 12 : 46 - 48
Issue Date	1985-05-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045135
Right	
Relation	



特殊状況下における 子どもの感情発達

なまいき

山田貴洋子

一、特殊な状況とは何か

葦山南小学校（静岡県）の前身は葦山小学校共和分校であり、昭和五十五年度迄は、一年生から三年生までをかかえる分校であった。

それが児童数の増加等による地域の希望により、昭和五十八年度の独立を目指し、別表(1)のように年度進行によって規模を拡大し、昨年度（昭和五十八年四月一日）になって、六年生までを含む児童数六八一名の独立校になったわけである。

そのため、昭和五十四年度までは四年生になると共和分校（現南小）から本校（現葦小）へ移っていた児童が、共和分校で残りの四、六年生までを過ごすことになった。つまり、昭和五十八年度の葦山南小学校の六年生は三年生の時より上級生を知らずに学校生活を送ってきたわけであり、言い換えるならば四年間ずっと最上級生であった

のである。

子どもの感情発達が家庭生活と共に学校生活の諸々の環境——特に縦横の人間関係に極めて強く影響されると言われる中で、葦山南小学校の昭和五十八年度六年生の過去四年間の学校生活

別表 1

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
53	◎	○	○			
54	○	◎	○			
55	○	○	◎			
56	○	○	○	◎		
57	○	○	○	○	◎	
58	○	○	○	○	○	◎

年度

(681名)

特殊な状況を設定することになった四年間

経験は非常に特殊な状況であったと考えられる。

二、研究動機

葦山町立南小学校昭和五十八年度六年生の考え方・感じ方・或は行動の仕方が他校（主に地域性を考慮し元本校である葦山小学校）と比べ異なるのではないかと感じたのは、私が着任した当初（昭和五十七年四月、当初五年生）であった。

そのことを裏付けるべく他教員との意見交換をしたところ、たしかに彼らの態度にその傾向が顕著に現われ始めているのではないかと言う答が返って来た。そして、その原因についても前述の様な特殊な状況（四年間の最上級生としての学校生活）にあるのではないかと考えられていた。

そこで、本研究をすることにより一般普通児とこの特殊な状況下にある児童との感情発達の相違を探り出すと共

に、今後の児童の育成の資料にしようとしたものである。

三、研究方法

前述の様に特殊な状況に児童が置かれることは極めて少ない。そのため、資料どりがしにくいのが、特に今回は、特殊な状況に置かれた昭和五十八年度葦山南小学校六年生児童と一般普通状況に置かれた六年生児童（特にここでは地域性を考えて昭和五十八年葦山小学校六年生とした）との比較をすることにより特殊な状況に置かれた児童の感情発達の特異性を探ることとした。

また、ここで特殊状況を作り上げている葦山南小学校の前身は共和分校であり、この分校の歴史は古い。そのため、昭和五十八年度六年生児童の親もこの共和分校出身者ではないかと考えられる。そこで、この親の子に与える影響も考慮する意味で、親に対するアンケート調査も行うこととした。

資料は次の通りである。
 (一) 作文「兄弟」に見る特異性

(この資料では、特殊な状況に於ける児童の人間関係のとらえる方も探る)

(二) 作文「卒業にあたって」に見る特異性

(この資料では、特殊な状況を経験し、最終的に何が残るかを探る)

(三) 特殊な状況に置かれた児童の親へのアンケートに見る親の子に対する影響

(この資料は、前述の通り)以上三点にしばり、研究を進める。
 (二月七日)

四、研究結果

前述の資料(一)(二)(三)の資料取りは済ませたものの(一)については処理が不十分であるため、ここでは(二)(三)についてのみ結果を報告することにする。

①(二)作文「卒業にあたって」に見る特異性(表Ⅱ)に見られるように、特殊状況下に置かれた葦山南小児童は、葦山小児童と比べて、六年間をふり返り、思い出として述べている所が少ない。やはり、「南小独立」という一つの事実を意識が止められていることがはっきりとわかる。それに伴い「第一回卒業生」というテーマも出てくるわけであるが、それについては次の様な具体例が挙げられる。

・第一回卒業生として、ほこらしく思っている。

・偶然ぼくたちは南小学校の第一回卒業生になりました。とてもうれしいことでした。

・はじめはうれしかったけれど、六年生になってみると、とても大変なことだと思ふようになりました。

また、葦山小児童が過去を扱っているのに比べて、葦山南小児童では卒業後のことに意識が止められており、特にその中でも「中学校へ進学するにあたっての不安」が主に提示されることになった。ここでも、次の様な具体例が挙げられる。

・葦小と一緒にになると、いろいろ比べられるし、誰も知らない人も多し。

・とても心配なのは葦小の人たちと私達と仲よくできるかです。

・中学になれば葦山小の生徒も入ってきます。

・私達南小の六年生は、今の中学生(先輩)を知りません。

以上、二点が(二)の調査の結果として報告されることである。

②(三)特殊な状況下におかれた児童の親へのアンケートに見る親の子に対する影響

調査の結果、葦山南小六年生児童の親は、それほど共和分校(葦山南小の前身)出身者が多くないことがわかった。(九十四名中十六名)それに伴い、子へ与える影響もそれ程大きくないのではないかと思われたが、次の様な結果が得られたので報告する。(表3)

五、考察と今後の課題

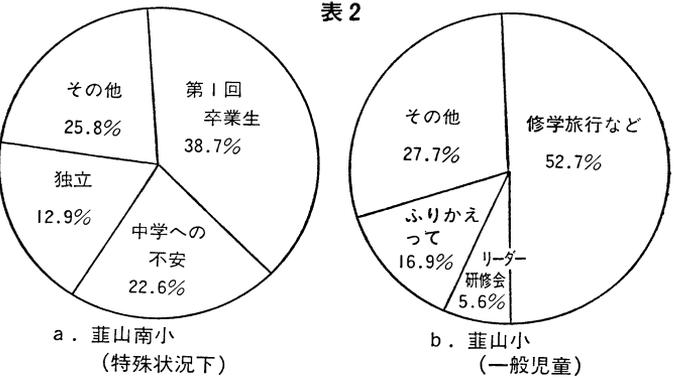
以上の様な研究結果が得られたわけであるが、このことから次の様なことが考えられる。

まず、最上級生として四年間過ごした場合客観的に冷静な立場で六年間をふり返ることができないということである。つまり、意識が常に最上級生という所に止まっているため、第一回の卒業生になったという点にしかテーマがひろえないのである。表2の葦小と比べるとはつきりするように、修学旅行やふりかえってというテーマは、南小では、ほとんどみられないのである。最上級生として四年間おくれたことで第一回卒業生となることができたわけであり、そのことが葦山南小児童の自信へとながらってきているわけである。ただ、このことは反面、葦山南小学校時代を過去として処理することができないことを意味している様である。というのも、葦山小児童に六年間をふりかえってというテーマが多いのに対し、葦山南小児童は、近い将来への不安を訴えている者が多いからである。これは特に注目したい点である。これを他方面から見ると、何を意味しているかという点、最上級生として四年間過ごしてきたものの、年月を追っての積み重ね(成長の正常な手順)がないため、友達作り方、上級生への接し方などに不安が生じているのである。つまり、自分のことのみならず、不安なく処理できても、対人関

表3 親へのアンケート

- ・共和分校出身—16名 (94名中)
- ・本校へ移った時の感じ
- ①肩身が狭い } 5名
- 本校の子が大き } 6名
- く見える } 7名
- ②ライバル意識 } 4名
- ③仲良くなれた } 4名
- ④感じない } 4名
- ⑤その他 } 4名
- (親、教師に本校の子に負けるなど励まされ、向上のステップとなった)
- ・分校出身者の結びつき
- ①強い 9名
- ②感じない 6名
- ・共和の伝統について子どもに話すか
- ①話す 12名
- ②話さない 4名

表2



係に於いて——特に对上級生——はたいへんな不安感を持つてゐることがわかるのである。

以上、二点でわかるように特殊な状況で四年間を過ごした場合、自己処理能力や対下級生についての感情発達は著しく、对上級生についてや環境の変革(この場合、普通状況にもどることに)に対する処理能力といった感情発達に遅滞がみられるのである。また、これらを誘発する原因の一つとして、

表3に見られるような親のライバル意識(対菲山小)、分校出身者の結びつきの強さという意識、また、語りつがれた古い共和分校の伝統意識といったものが大きくあげられるのである。人数は少ないものの、こうした親の意識が子どもの感情発達に著しく影響を与えることは否めない事実のようである。

以上、まだ資料(-)については処理中であるが、研究を進めてきたわけである。それでは、この様な結果、考察から、私達が考えなくてはならないことは何であろうか。それは、子どもの感情をどこでコントロールしてやるかという問題に通ずる様に思う。この特殊状況下の様に、正常な成長の手順をふまず四年間最上級生として過ごした場合のメリットである自己処理能力などについては、現在の一般児童にも身につけさせたい感情である。またデメリットである環境の変革への処理能力などは、現在の一般児童では身につけてゐる感情であるので、やはり続けて伸ばしたいものである。つまり、メリッ

トとデメリット両者の利点を合わせて持つことが、将来的な課題と言えよう。

また、他方、この特殊状況で育った五十八年度菲山南小六年生について、一生のうちどこかの地点で、正常な成長過程を過ごさなかったことへの処理をする必要があると思うのである。そして、デメリット部分を少しでも解決していくということが今日の課題といえよう。

ここに述べた様な特殊な状況は、非常に珍しく、過去にも、将来にも類を見ないのではないかと思われる。それだけに、ここに調査研究したものだけでなく、この後も研究を進め、今後の児童理解へと生かしていけたらと思うのである。

参考資料

(静岡・菲山南小教諭)

わたしは、南小第一回卒業生だけ、三年生、四年生、五年生と最上級生でした。

一年生の時は、木でできた分校、一年生の二学期ぐらいで鉄筋でできている新しい校舎にうつり、四年の時に、教室がなく、図工室や図書室、音楽室で、勉強をしていました。

そして、やっと新しい校舎がまたできて、五年生で、新しい校舎の一番上、三かいで勉強しました。

そしてプールができて、体育館もでき、南小たんじょうして、あと少しで一年たつ。

六年間とつてもたのしく、みんなと仲よくできた。

前、低学年のころは、早く中学生になりたいと思つていた。

でも今は、小学校のころが一番いい中学になりたくないと思つています。それと言うのも菲山小学校と一しょになることです。

菲小と一しょになると、いろいろと比べられるし、だれも知らない人も多いし、知っている人だつて5、6人しかいないし、どうせ組になってひと組に、なんんかかわからないけれど、少ししかないしひとりだと心細くて、とつてもいやだと思ひました。

兄さんから聞いたけど、三人とも、「中学がぜつたいおもしろいぜ。早く中学になりたいだ！」といつもいいます。

兄さんの場合は、菲小で、人数が多くてその時は共和分校で菲小が多いから話し合手がいるからいいけれど、わたしは南小は、同じ組になるかくりつが少なからずです。

S 58、3、19卒業生
卒業にあたって

ぼくは、一年に入學して、初めは、いやだと思つてた小学校も、あと少しで、終わろうとしてゐる。この、六年間の小学校生活があつたという間に過ぎたような気がする。でも、まだ中学校がある。でもぼくは、あまり行きたくないとは、思わない。それは、最近、リ

ンチなどと言うことを、聞いたりして、もし自分が、リンチなどをやられたらこわいから。でも、ぜつたいに行かなくちゃならないので、行くしかないと思つた。そして、南小第一回の卒業生なんて、めつたにないので、とても運がよかつたと思つた。そして、三年の時から、最上級生としてやってきたけれども、その四年間、最上級生をやるのも、とても、めづらしいと思つた。そして、中学校に行つても、部活動や勉強なども、がんばりたいと思つた。

卒業にあたって

卒業にあたって、私たちは、第一回の卒業式をむかえます。私は、いままでは、みんな運動会やマラソン大会は、菲小でやってきました。けどいまは、共和分校から、菲山町立南小学校とゆう学校ができました。そして、私たちの、新しい小学校ができたのです。

それから、プールもでき、体育館もでき、新しい、校舎もできました。けど、ものたりないのは、きゆうしよくセンターです。

私は、南小にも、きゆうしよくセンターをつくれればいいと思ひます。

けど、なにもやるのも、みんな、第一回、第一回です。そして、一番さいごまで、第一回がつかました。第一回の卒業式、第一回の卒業生として、ほこらしく思つてゐます。

こんどの三月十九日の卒業式は、まぢがえたくないと思ひます。(おわり)